令和４年度　学校評価結果及び成果と課題

１　課題分析の基準

（１）以下の基準で、課題を分析する。

◇平均の評価点が３．１以下の項目
◇平均の評価点は３．２以上だが、一部に２や１を１０％以上含む項目
◇昨年度の評価点よりも、０．５以上低くなった項目
◇職員の評価と保護者や児童生徒の関連項目との評価に０．５以上差がある項目

（２）上の基準に加え、自由記述の内容を併せて確認し、少数意見であっても学校運営を見直す上で必要と判断される場合は、改善策の検討を行う。

（３）評価の高かった項目に関しては、学校全体で改善策の検討は行わないが、これまでの取組を継続しながら、更に充実を目指す。

２　今年度の課題への取組結果について

（１）キャリア教育に関する項目の評価が昨年度に比べ０．１～０．３ポイント上昇した。

- 今年度キャリア教育全体計画の見直しに全校で取り組んだ成果と考えられる。
- 次年度は引き続きキャリア教育全体計画に基づいた指導を行うとともに、キャリアパスポートの効果的な活用を探りたい。

（２）PTA 関連の出席率や保護者向け研修会に関する評価は昨年度に比べ０．１ポイント上昇した。

- 学部別では幼稚部と高等部がやや低い結果となっているが、今年度は研修部担当の保護者懇談会や広報部担当の PTA 新聞編集、環境整備部担当のロード―レース大会での飲み物の配付など、昨年に比べて活動は増えている。

３　次年度学校全体で改善策を検討する項目について

（１）課題分析の基準から学校評価検討委員会で課題の抽出を行った結果、以下を検討する。

№.		具体的評価内容	検討の理由	検討主体と手順
職員	（１）-⑥	情報機器の管理や整備の充実を図り、授業や家庭学習における ICT 機器を活用した個別最適な学びや効果的な指導内容・方法の充実に努める。	平均の評価点が低い	教務部と各部で連携して学習効果を高めるための ICT 機器の活用の体制づくりを進める。
	（８）	① 業務改善アクションプランの方針に沿って学校が取り組むべき課題を明らかにし、業務の効率化を徹底する。 ② プラス１推進運動や安全衛生委員会の取組を中心にした働き方改革を推進し、風通しの良い職場づくりに努める。	平均の評価点が低い	管理職と安全衛生委員会が連携し、職員アンケートの内容などを基に業務改善の対策を検討し、取り組む。

生徒	5	先生は家庭や寄宿舎での学習の仕方についてアドバイスをしてくれる。	一部低評価	校内研究と合わせ、興味をもって取り組める等授業の工夫を行うとともに家庭と連携し、家庭学習の状況を把握する。
	17	新聞やICT機器を使って、必要な情報を入手できる。	一部低評価	職員（１）－⑥に同じ
保護者	6	タブレットやICT機器を活用した授業推進がなされている。	一部低評価	職員（１）－⑥に同じ
	20	福祉・医療・進路等に関する情報提供がなされている。	一部低評価	キャリア支援部と自立活動部を中心に保護者のニーズに沿った情報提供や学習会を計画する。

３　各学部で改善策を検討する項目

（１）課題分析の基準からの検討課題を導き出す。

（２）検討課題がある場合は、それぞれ改善に向けて早急に取り組む。

４　その他

（１）即時性が必要な事柄については、早急に改善を行う。

（２）２月の職員会議までに、改善対策の方針を整える。

令和４年度　長崎県立ろう学校　学校関係者評価報告

１　評価の実施期日・場所

・　期日　令和５年２月７日

・　場所　本校応接室

２　学校関係者評価委員

委員氏名	職業	学校評議員との兼務の有無
山本　学	元諫早特別支援学校長	有
青田　優子	長崎県聴覚障害情報センター職員	有

３　学校関係者評価の内容

（１）自己評価の結果について

・学校関係者からは以下の評価を受けた。

①　学校評価について		評価の平均値
1	学校評価は適切に行われている。	4
2	学校評価の結果から、成果と課題について分析が適切になされている。	4
3	学校の経営目標や評価項目は適切に設定されている。	4
4	保護者アンケートや児童生徒アンケートの結果から、分析が適切になされ、評価の低い項目についての対応が示されている。	4
②　学校運営について		評価の平均値
5	学校運営の改善に向けた実際の取組は適切になされている。	4

＜評価の基準＞

４：よくあてはまる　３：ややあてはまる　２：あまりあてはまらない　１：まったくあてはまらない

（２）具体的な御意見等

- 学校評価の集計結果がおおむね３以上であり、教職員の努力によるものと評価できる。
- 高等部の資格取得に励んでいること、中学部・高等部の地域貢献などの学校外での活動はとても良い取り組みであり、成果を上げている。
- 高等部の保護者に△が多いのはなぜか。
- 外国の「Special Education」は、「特別支援教育」とは訳せない。「Special」は「特別」や「専門的」を合わせたような言葉であり、教員は「自分はスペシャリストである」とプライドを持っている。日本の特別支援教育は決して負けていない。日本の教員に足りない「スペシャリスト」としての力量を高めてほしい。
- 教職員の手話力の向上が課題に挙げられているのがうれしく、安心した。
- 手話単語を覚えるだけでなく、日本語の文章を手話で表現する研修会を行ってほしい。
- 新しく赴任する教職員に手話を覚える機会を設定し、現在勤務している教職員には手話のレベルアップができる機会を設定してほしい。